

〈第二五話〉〈兵庫県〉○○○○○○○○○○ 一等兵 ○○○○

私の話は、クキスノヤルスク第三收容所の一作業隊長（故陸軍少尉△△△殿）の話であります。私達收容所は、昨年（昭和廿一年）依り、作業場に依り、組織をされる様になりました。私の組は、△△組と言つて、材料置場に作業して居りました。在ソ同胞は、誰れしもであります。昔と違ひ、精神的、且つ肉体的にも衰弱して居りますが、何にしろ捕虜の身故に無理して作業に出場して居ります。私の組員にも病弱なものがあり、又は急病の者も尋々ありました。そう云ふ時に診断を受けるのですが休務者の定員超過の場合は体の具合が悪くても無理し、作業にゆかねばなりません。斯ふ云ふ時に、私達の組長であった△△少尉は、医務室にゆき、ソ連の軍医、又は日本の軍医等に兵隊の病状を話し「この様な体では作業は出来ない。是非休ませてやってくれ」と頼みに行つてくれました。事は再三ありました。それでも通らない時は、作業場に行く作業員の監督に話をして、作業場で休ませてくれました。その様に自分の作業員の身体状況ばかりでなく、被服でも破れたボロ上衣等を着ていると、修理キレを呉れたり、又自分のシャツ等も兵隊にくれてやり、亡くなられた時に身の廻り品を整理致しました時、兵隊と同様の員数しか持つて居られませんでした。他の將校、組長等は、私物のシャツ、袴下等は大切に持つていられるのです。作業に致しても、あの嚴寒期の時は、ロシア人と同じ仕事をしている時、片方はロシア人工場で支給された作業手袋をして作業をし、私達が手袋なしで仕事をしてゐると隊長は捕虜の身を忘れて、監督に同じ仕事をしているから手袋を何とかしてくれ」と言つて話してくれた事もありました。その時、監督より「お前達は、捕虜ではないか」と言はれ、涙を流して私達に「俺達は仕事は目的ではない。俺達の目的は皆んなが祖国日本に帰る事だ」と言つて、我慢してくれ」と言はれた事もありました。隊長は、今年の七月三十一日朝、心臓麻痺で亡くなりました。私達の組は、隊長の靈に對して、祖国日本に帰つた暁には、共に手をとつて日本再建に努力しよう」と誓ひました。

〈第二六話〉長野縣○○○○○○○○○○ 一等兵 ○○○○

K軍曹の類は堂々たるものだった。けれども、それにも増して自分等の注意をひいたのは、この人の実に深味のある眼ざしだった。すべての経験を淨下し、自己鍛錬を加へ、慈悲の「握り□」で色づけた様なその眼付に會ふと、何時も自

分等は、我が身の汚なさに恥ぢ入るばかりだった。果してK軍曹は、作業指揮者としても稀に見る穩やかな人だった。ほかの指揮者が、ともすれば懐手で兵隊を叱咤する悪癖を、K軍曹は全然持たなかつた。ロスケ側からの小言は、俺が皆な引受ける。どんなに俺が非難されても気に病むことはない。俺一人が我慢すればいいのだ。そのつもりで、皆はくれぐれも注意して、決して無理をするな。身をこはしちやいかん」と言ひ言ひ、身心では率先コツコツと働きつゞける人だった。收容所では「食ふこと」がうる□□がK軍曹に限つて、「食ふこと」で兵隊にいやな思ひを抱かせることは皆無だった。「こんな格悟の悪いパン食へるか」とどなつて、隣の班長がごねてゐる時、K軍曹は、「今日のパンは大きいね」と言つてニコニコしてゐる。氣を利かした兵隊は、飯の盛りを特別よくしたり、増食を運んで来たりすると、K軍曹は怒つて受け取らなかつた。被服の受領等も、□□で一番程度の悪いのを貰ひ当て、充分満足してゐた。K軍曹の公休日、□□半夜の作業から帰つて、K軍曹のお茶の接待をうけた。一緒に朝飯を食ふ（兵隊の帰る迄K軍曹はたべない）楽しみは格別だと思はぬ兵隊はなかつたらう。自分は還る時、K軍曹のところへ挨拶に行つた。今は青々とそり落した頬つべたをさすりながら、「どうかお元氣で」と言はれた靜かな声音と、例の魅力ある眼元の涼しさをしみじみ想ひ出す。そして、こんな人こそ一日も早く帰つて戴きたいと念願する次第だ。

〈第二七話〉石川縣○○○○○○○○○○ 兵長 ○○○○

浮魂堂

敗戦と云ふ文字のために、シベリヤ沿海洲に行かねばならぬ□□運命、それは死にひとしきものでした。生きる氣力すら失つて居た吾々に、待つて居たかのように待つて居たものは強制労働でした。併し、これも日本の賠償の一端を信じ雨の日、風の日、又、雪の日、働いた。実によく働いた。早く、一日も早く帰りたいために、併し、体はそれ以上の動きは出来ず一人倒れ、二人病みして、なつかしいなつかしい祖国を想ひ、父母を想、又妻子を呼びつゝ、シベリヤの地に眠り逝く戦友のため、▽▽▽△△△△△、我等は、慰靈堂の建立を病院長に願ひ出しました。病院長もよく許可され、早速、△△氏は設計、▽▽氏は調刻、私は凶案並に着色、二二年五月末日着手、六月五日完成、御本尊に阿彌陀如来を謹寫致、お守りを納め、日本のマーク、供養門をかざり、美しきお堂が出来上がりました。このお堂の元に戦友が集り、毎月一日、十五日にはお詣り致し、お墓の清掃を實施し、病める同胞を看護しつゝ、身づから最後迄残留する事をソ軍側に申し出で、

お堂を守って居る戦友の居る事をお傳へ致します。遺家族の皆様、御佛様の披ひに
対し、決して御心配なき様、御傳へ致します。日本へ帰ったなら、亡き戦友のため、
日本の地にも一度、淨魂堂を建立するのと同様張って、今も尚、雪近きシベリヤ
の密林の中で、雨風と戦って居ります。永遠に淨魂堂に眠る戦友よ安らかに。

人知れぬ 異境の雪に 倒れとも
後世にのこる 汝等勲は

〈第二八話〉 岐阜縣○○○○○○○○○○ 一等兵 ○○○○

□□二年前敗戦と共に、武器を捨てた我々は、感囚^{てんご}の身となって酷寒肌をさすシ
□□へ送られ、苛酷極まる労働と飢と寒さと戦ひ、全く言語に絶する苦難の生
活をつけ、幾十萬の將兵等しく、寒月を押し泣かざるはなかつた。殊に私の
居た沿海洲ムーリ地区一〇六收容所は、所長が軍人で各□□人上りの□□人であ
った。□□(以下、判読不能)

(一) 行判読不能

全く個人主義となり、自分さへその日一日が無事で送れさへすれば、と言う氣
持になつてゐる時の出来事である。その日、我々乃小隊は水道工事に出て、一人
当り長さ三m、深さ二mの穴を一日のノルマ(作業量)と決められ、作業に汗を
流してゐた。その時、▽▽と云ふ老兵が、体の具合が悪くて作業が續けられぬか
ら少し休ませてくれと小隊長に申出た処、小隊長は、今日は個人ノルマを割り当
てられてゐるから駄目だと、頑張つてやれと言ふて承知しない。彼の顔は眞青で、
如何にも苦しそうだ。決してウソでない事は分つてゐるが、作業成績が上らない
と、小隊長は責任上チヨルマン(當倉)入りのため、承知しないのである。それ
を見てゐた△△上等兵が、隊長殿、彼は今朝から具合が悪くて朝食もたべて居ら
ぬ。作業は無理だから休ませてやつて下さい」と申し出たが、隊長は承知しない。
そこで、△△はロスケの監督に交渉して、自分が▽▽の分迄、二人分掘る事を條
件にして、彼を休ませる事を承諾させ、分秒の休みなく、大汗を流して、遂に夕
方迄に二人分のノルマを遂行し、更に疲労せる体を物ともせず、苦しんでゐる▽
▽を背負つて、四軒もある收容所迄帰り医務室迄つれてゆき、診断をうけさせた。
亦、更にその夜は、熱の高い戦友の▽▽の枕許に一睡もせずついて、タオルで頭
を冷し、翌朝迄看護した。全の頭の下る様な戦友愛に燃えた彼の行動を、いまだ
に私は忘れる事が出来ない。

〈第二九話〉 福岡縣○○○○○○○○○○ 軍曹 ○○○○

我等在ソ約二年、毎日毎食の給与は、總べて其の作業量に應じてなされてゐた。
□□□□悪ければ、食事は量は少いのは勿論、ソ側の幹部からは非常に強くそ
の責任を問はれるのだ。従つて、我等はその「ノルマン」を果すべく作業の質と
言ひ方面には、場合によつては乱雑になることもあつた。我等が主としてやつて
ゐた森林伐採に於ても、木を倒したならば、必ず森林整理(枝を拂つて一ヶ所に
山積し、切株は或る規定以上高くせざる事等...)をやる事になつてゐる。但し、
前記の如き事情なるため、各人は材、又は薪を少しでも多く倒さんがために、こ
の整理をおこたがちであつた。たまたま△△氏は、その能力をソ軍側より見
込まれ「デシャートニツク」(作業監督、そして、伐採の方を受持つてゐたが、
彼は各人の斯がる作業に対して、ソ側との間に立つて相当ひどく責任を問はれた。
各人は、彼の立場を十分知り、彼から注意をうける迄もなく氣の毒だと、心の中
では常に謝してゐた。然し、殆んどこの作業に於て、左様である如く作業の「ノル
マン」たるものは、極めて高く規定通りの作業をやつてゐたのでは、毎日毎食、
水の如くスープを飯盒の底に僅かに少いパンのきれ(但しパン一食のみ)を食べ
ねばならない。それ故、我等は彼に対しては、すまないすまないとは思ひつゝも、
作業の質よりも量に氣を取られて、少しでもその日の食事を多く得る如く働いた
のである。彼は、十分この事情を知つてゐる。あのシベリヤの原始林の中に入つ
て、朝早くから昼食採りにも帰らず、我等が何日か前に伐採した作業場へ、彼の
シベリヤ独特の酷寒、深雪と戦ひながら、或ひは夏はあの山蚊と「プト」とに惱
まされながら、唯一人一言の不平等もこぼさず、我等が「ノルマン」を上げるため
に、□□□□不□□理等に努めてゐた。ソ側の幹部すら、作□□□□□□にひ
どくあたられても、或ひはその他どんなつらい事があつても、決して我等につよ
くあたる事□□ければ、叱ることもなかつた。常に温厚なる人格を以て、我等に
接して呉れた。然し、尚然やらねばならぬと思つた事は、ソ側より指示注意があ
るなしに拘らず、必ず我等に之を爲さしめた。たまたま我等がソ軍側の不当なる
誤解によつて、思はぬ叱責をうけるが如き場には、我等の正を主張するために、
彼にして斯かる氣魄が如□□にあるのだからかと疑はれる程の峻烈さを以て、斗つ
てくれるのである。自分は、彼に対しては、恰も兄に對するが如き慕はしさを感
じつゝ、交つてゐた。捕虜の環境にありて、斯様な人の存在を見出した事は、我
等の誇りでもあり、また見るべき必要の十分ある事を痛感せり。

第三〇話 長野県 ○○○○○○○○○ 上等兵 ○○○

第四区第二支部二三収容所のソ軍側幹部（所長、副所長、作業監督（四）保線監督（四人））は、非常に日本人の自主生活に反対、不協力の態度を示すのみか、作業監督の如きは、銃を肩に懸け現場を廻り、作業能率如何に拘わらず、けりなぐり、長時間強制労働を強ひ、そのため百名余百名余の収容所日本人は日増しに活気なく唯々日一日を過し、生地獄の如き様になった。此の時、保線関係、◇組▽▽、△△の二名は同胞の窮乏困苦を見るに見かね相談し、薄暮歩いて七〇軒余のテルマ政治部に更情を話さんとにげたが、二〇軒附近の収容所にて歩哨に発見され、事情を通譯を通じて話し、覚書を通じてテルマに出してもらひ本人は二三収容所に返された。而し一度逃げた事が分り、事情が自分等の事である事を知ったソ軍側幹部は、二人を五日間営倉（苦役）物置に入れ罰し、これが爲疲労と肉体的労働に依り、間もなく発病入院の止むなきに至った。その後テルマよりの政治部が山奥の二三収容所に実情調査に来て、ソ連幹部を調べ、日本人の言ひ分の正なるが分り、職員は更代され生地獄の収容所も明朗になり日本人が自主規律の本に帰還の日迄元気に日一日を過せる様になった。

第二二話 広島縣 ○○○○○○○○○ 軍曹 ○○○

監督の窮乏を救ふ△△君
私が居たホルモリン二〇収容所に「▽▽▽▽」と言ふ監督が居りました。彼は口やかましい人間でしたが、氣立の至って良い監督でした。丁度今年の六月頃だったと思ひます。彼は或る事故のため、半月分の食料切符を取上げられ□□ため、水を呑み河で魚を釣り飢をしのいで居りました。然し乍ら何程の足しになりませう。現在、日本に於け□以上、食料困難□□金とてもたぬ四人上りの下端監督である彼は日頃の人氣も段々なくなり、意氣消沈してゆきました。この時、△△君は小隊長として、彼の監督下にありました。それを知った彼は早速、自分に与へられる毎日のパンを与へ、又日頃労働の結晶として取った約五日分の給料全部を彼にやりました。又彼の監督下にあった他の小隊の人々に話し、救済の手を差のべ、半月を遂に無事過さす事が出来たのでした。日頃の恩を返したとは言へ補廣の身に於いて限られた最も大切な少量の糧をさき買ひたい煙草も買はず監督に盡した△△君の行爲は人々を感心させるものがあり、又ソ連人の我々に對

する態度を改めさせる原因ともなり、これを知る我が収容所の人々は△△君の行爲に深く感謝感激しました。

第三一話 静岡縣 ○○○○○○○○○ 兵長 ○○○

サラツカの第十六収容所から、ムリの第二〇六収容所へ移動する時の事でした。昭和二十一年十月三日、シベリヤには早冬が訪れて、朝から雪が降り續いて居た。私達は、驛附近の道路作業に従事して居たが、晝すぎ、通譯の▽▽さんが百名の異動者を呼びに来た。私達はいそいで収容所へ帰った。移動準備、装具の検査、あはたゞしい中に時間がすぎた。五時頃だったらうか、駅に汽車が入ったから、すぐ出発する様に、夕飯は時間の都合で支給しない」と言ふ。ソ連側の指示、この時の主計元中尉△△さんのとられた処置が実に嬉しかった。主計さんは、特にソ連側に夕食を支給する様交渉し、私達が衛門前に整列する前に、飯と汁を馬車に積んで駅に出發したのであった。私達が人員の点検を終り、隊長以下の戦友に別れを告げ、五〇〇米程離れた駅へ着いて、汽車にのりこむ。飯樽と汁樽が線路際にもちこまれる。私達は、飯盒に温い飯と汁を受け、主計さんの臨機の、そして私達の給養に関して、万全を期す温い心に涙ぐましく感ずるのだった。△△さんは樺太の人とか。そして小樽高□出の若い主計將校さんでした。この人の性格を表す話にも、こんなことをきいた。△△さんが糧秣倉庫で糧秣を受領する時、ソ連側の計量したものを確める。その時超過があれば、その場ではつきりと返納する。こうした事は再三あったそうで、ソ連側の糧秣係も△△さんの人格をすっかり信用して、何かにつけて便宜をはかってくれたそうである。これは決して外交上のかけ引でも何でもない、正を正とし、否を否とする眞面目な主計さんの表はれであった。だからソ連側にも、正は正とし要求し、間違は間違として強く交渉したので、収容所内給与生活は極めて明朗であった。△△さんは、私達が帰国する時も未元の収容所で、昔と変らぬ態度で戦友のために働いておられるときいてゐた。シベリヤ生活で頭の下った人の一人、△△さんの健康を祈って筆を置く。

第三二話 北海道 ○○○○○○○○○ 兵長 ○○○

シベリヤ特有の寒さも、愈々ものすごい十二月の末でした。連日の伐木作業に分隊長以下、大分つれてをり眞の日も、▽▽君は朝から身体が少し悪い様でした。□□□□□□□□遂に失心、卒倒してしまつたのです。折柄の降雪のため、歩行

る注意力の欠如、ここには必ず怪我が付きものです。ウーン、アイッ……意識もあいまいな患者のウメキ声、表は「ヒューヒュー」吹き荒ぶシベリヤ嵐、吹雪の深夜、重傷患者は、或る病室にはひ廻つてマ▽班長の心配相な顔が寝る事も忘れて夜の明けの迄見守つて居ります。又、こう言ふ事もありません。盲腸患者の△△、◇◇兩君不幸にして手術の結果が悪く、高熱にうかされ、之が兩君の最後かと思はれた時、衛生兵の一人がカンフル注射をうたうとした時、熱にうかされ無中であつた二人がパツと目を覚まして、どうしても厭だと言ふ事をきかず、その衛生兵も途方にくれておつた処、他の一人が「ハッ!!」と気が付た様に「チャー」マ▽班長を呼んで「ようか」と言ひましたら二人共黙つて「□□」した様でした。只ちにマ▽班長が取るものもとりあへず馳けつけて来たのは言ふ迄もありません。その結果、幾日かあれ程の重病であつた兩君が二人共揃つて元氣を取戻して行つたのです。之もマ▽班長の誠心こもつた看護の結果だつたのです。知らぬ他國に、まして戦争後の抑留生活ラポート(作業)にこき使はれ、環境給養の劣悪、人の心の利己的に、そして自我に走り易い今日此の頃、懐しい祖国を離れ、親兄弟□□と別れ、そして今又、傷疾病魔のおかすところとなつた不幸な戦友□□心の友となり、ともすれば荒み勝ちな氣持を慰め、善導し、再起を願ふマ▽班長の心のおアシスとなつて益々健斗しておられる事□□。聞けば、彼マ▽君、軍隊入隊の際、お母さんがお別れの言葉として、「他人によくする事が親孝行だと言われたとか、それを未だ忘れず実践し、それに依つて生がいが感じている処に、人間マ▽君の人格的面目躍如たるものがあります。夢に迄見た懐しい祖国の山河をこの目で見て、その土地に第一歩をしっかりと踏みしめた時、再び想ひ出されるのは、苦しかった抑留の生活、又、未だ尚残された戦友諸君の事共です。必ずや元氣で帰つて来てくれ、特に病床に伏される戦友諸君よ。マ▽班長の熱意ある看護により一日も早く元氣になり、一日も早く歸國される様、マ▽班長、貴君の益々御奮斗を祈る心や切なり。

△△△△△△△△△△ 軍曹 △△△△

二ヶ年間の抑留生活を通じ、我々を一番楽ませるのは、作業を終へての夜だつた。一日として忘れる事の出来ない故郷の父母、妻子、兄弟の夢も結び、一日の疲れを癒すかと思ふと、又我々の一番厭に感じて居るのは、矢張り零下四〇度も有る冬期作業整列の鐘だつた。しかし、此の鐘の鳴るか鳴らぬかに、毎朝一番先に整列する人が居た。之は新潟縣○○出身元陸軍曹長○○と言つた。年は四十才を

越して居り、我々は親爺と云つて居たが、收容所一五〇〇名も此の親爺の眞似は仲々若い者も出来なかつた。或る冬の朝、今日も相変わらず零下四十度も有るのに一番先に整列し、不言実行、組員の整列を督勵して居た。此の様な寒い日に、我々の一番注意せねばならぬのは凍傷予防である。親爺も何時も朝から注意を怠たらなかつたが、運悪く一人の患者を出して了つた。大した程ではないが、足の指が二本ばかり白くなり、その日は作業を休んで居たが、夜帰り、診断を受けると、作業指揮者として責任を問はれ、親爺は三日間の警倉を命ぜられ、体の暖まるひまもなく入倉した。組員も一人の不注意の爲に親爺を入倉せしめる事を残念がつたが、どうする事も出来なかつた。不言の親爺は患者を恨む事なく、自分の悪かつた事を、組員に詫びた時こそ一同の胸はこみ上げて来た。之は十二月三十一日の事で、なつ可しの故郷では楽しい年越の夜であるのに、親爺は氷る様な入倉の一夜を送つて来たが、何一つ愚痴を言ふ事なく昼の作業に出る組員を督勵した。こうした昼は作業、夜は入倉生活を続ける親爺の顔色も悪くなつて来たが、何一つ云は須、作業より帰ると「では行つて来るから火の元を注意して呉れ」と云ひ出て行く。親爺に「御苦労様です」と云ふ言葉より何もなかつた。三日目の作業より帰るや、親爺は四〇度の熱発して入室したが、尚も心配するのは、上言尔も凍傷になつた患者の心配と組員の作業成績向上に一念して居た。今尚自分は當時を顧みる時に、親爺の顔が眼の前に浮んで来るが、之こそ将来鏡として行き度いと思ふ。又、全国民の一人々々が、お互に不言実行、悪い事迄自分でその責を負う誠心が有つたならば、団体生活も明かるく、又新日本建設に大切で有ると思ふ。

○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○ 上等兵 ○○○○

周囲で四方山の雑談がしきりと取り交わされて居る。私は余り尔も一変した彼等の態度におどろく前に、三年間になんなんとする在ソ生活を通じ、眞の日本人たるの面目を失はず、今日迄生き抜いた勝利の快感に酔つて居る。斯る信念が何によつて培はれたか、それを書き綴り度いと思ふ。私が最終收容所たる五百十三管区第二收容所に轉属したのは、昨年十一月でした。当時新設した許りの收容所は、所謂嫌はれ者同志の集りで、毎度喧々囂々たる所内の無統制さに、私は「えらい所へ来たものだ」と呟いた事も再三ならずだつた。當時の初代大隊長△△中尉は、斯る無頼漢にも等しい者の集ひを一步々確実に自己の掌握下に収めて行かれ、所内の設備も、我々兵隊の統制と平行するが如く完備され、我々の顔色は日増しに生き生きとして来た。しかし、それに反し隊長の小肥りの体軀は、次第次第に

瘦せて行つた。語らざるその心労は、実に吾々の想像に絶するものがあつたと推察されま須。毎夜、再三ならず所内の巡察をし、毛布をはついて居る者の毛布をなほし、深更に及ぶ迄、麻雀等に遊び耽ける者には注意を与へる。その姿を時折見かけて、吾々は感謝の念で一杯でし多。又、吾々がソ連側と悶着を起したり、又事故を起して、少しでも精神に緊張を欠く点があれば、直ぐ全員集合の上、「お前達は如何なる場合にも日本人たるの面目を失ふな。その責任は、俺の命をかけても持つ」と言はれ、対ソ交渉に一身の犠牲をも省みず當られた。この誠意が何で兵隊の良心を甦かへさずにおきませう。隊長の意図は直に兵隊の心に映り、真の日本人たるの集団は次第に完成されて行つた。今日ウラチオの数ある収容所に於て、隊長の顔を見て自づと上る拳手の敬禮、斯る情景は我が収容所以外に絶対にならぬと思ふ。しかし、△△中尉も遂に我々と別れる時が来た。それは自己の思想と相容れざる主義をこの収容所に入れる事越頑強に拒み通し、彼等の策に依つてスーチャン地区の將校大隊へ送られまし多。しかし去るに當つて隊長は腹心の者に「俺は形の上では彼に負けた。だが彼は、自分は内地に帰りたいくない。帰るとアメリカの官憲が怖い」と。だから彼の恐怖を抱いた信念と、たとへ銃口を擬せられても信念を飛躍さざる信念を持つた俺とでは、絶対に俺の勝だ」と語られた相です。吾々が涙をもつて隊長と別れて以来、△△中尉の意図を固く胸に秘め、新大隊の下に最近漸く出来上つた民主同志會の行き方越、厳正に批判して居ります。最近特に自覚した極く少数の人ではありませんが、真の民主主義に立脚し、日本人たる節操に磨かれ更に飛出した段階に迄到達した人が現はれたのをみて、非常に心強く感じ居ります。私は未だ胸中に慈愛をこめた隊長の声を聞いて居ります。更に強固なる信念を培ひ、祖国再建の途を歩みます。

以上

シベリヤ曠野に咲く花 (其十二)

(表紙)

シベリヤ曠野に咲く花 (其十二)

昭和二十二年十月十八日

中部復員連絡局

(表紙裏)

一、本資料は昭和二十二年九月二十八日

昭和二十二年十月二日

昭和二十二年十月六日

舞鶴に上陸せる

栄豊丸
高砂丸
第一大拓丸

復員者より集めた美談である

一、配布先

全復員関係官署

〈第一話〉山口縣○○○○○○○○ 曹長 ○○○○

第三十九師団工兵第三十九聯隊

藤第六八六九部隊

陸軍兵長 △△△△

右は終戦後、ソ聯「ロスカミノゴロスク地区」第四十五収容所第五分所(ピリアノフスク)に収容されて以来、克く部下を指導せり。昭和二十一年七月頃、當地に在る礮山の作業小隊長となるや、坑内現場の機械器材の不備、不足、及兵員の少なき爲等、全く採掘設備、及手段の不十分なる爲、毎日の課題たる標準量遂行に日夜苦心せり。特に、体位の底下しある収容所生活は、採掘作業に支障せり、ソ聯側の現場監督の日々の出産量要求は、逐次標準量の高の不能なる出産量を強要せり、収容所には政治部員(將校)派遣せられありて、生活現場に於ける標準出産量不達を現場監督より通報し來りて、之生産を障害するものなりと、部員

の許に呼出されて指摘され、設備不完全なる爲、標準量遂行は不能なる旨、陳述するも、之を認めず。唯々、徒らに生産防番なりと。遂に本年五月中旬頃、小隊長を営倉處分(三日)にせり、当時の中隊長、及大隊長、各幹部は、「ソ聯收容所側に善処方取計ふ爲、再度交渉を重ねるも、効を奏せず。爲に曹長は作業に服しつゝ、其の懲罰に服せり。小隊内の下士官も、兵も能く小隊の意中を察し、小隊長を中心に一致団結、「ソ聯側の強要に耐へ忍びつゝ、疲労其の極に達するも、課題の標準出磁量完遂に、唯々、飯国の日を夢見つゝ、精進せり。要之に曹長以下、小隊長全員固き団結の下、労働に耐へ服し、日本人として恥ぢざる行爲と謂ふべし。

〈第二話〉茨城縣○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○ 上等兵 ○○○○

「戦友の友情に泣く」

昭和二十二年九月、私は敗戦の身を抱いて、朝鮮平壤郊外の三合里と云ふ收容所に集結を命ぜられまして、つめたい鉄鎖の中に收容されました。これから私の苦難の生活がはぢまったのでありますが、この言語に絶する苦しい生活の中に、激励と慰安とを手へてくれたものがあります。それは何であるかと云ふと、入隊當時から何時も一緒にやって来た戦友Vマ君(福島県出身)、△△君(全上)、◇◇君(茨城縣出身)の三人でありました。召集も同じに受けたこの三人の友情のもとに、二年余にわたる不自由な抑留生活に堪へ忍ぶことが出来、いまなつかしい祖国の上を踏み、家郷を訪ふことが出来、父母妻子と相まみえることが出来るのであります。私は帰国の喜びと共に、湧然と胸を打つものは、この戦友の麗しくも温かい心情であります。三合里を昨年夏出て、故国に郷るのかと思つた所、豈はからんシベリヤに入り、あの磁野を起えて、遠くロシアのコーカサスのジョールジャ共和国の首都トピリスに收容されました。此処で、またロスケの厳しい監視のもとに、土工作业がつゞ□□のです。昨年冬から、今年の三月までの作業は、砂利の採取と、運搬であつて、この運搬作業が、また實際経験したものでないとはわからないほどきつい作業でした。四人一組になつて、担架で川から一二、一二の掛声をかけて運ぶのでありますが、共產主義の国家では、仕事にノルマ、即ち作業の基準といふのがあります。担架に二ばい砂利を入れて、二〇〇一、三〇〇米もある距離を五六十回運んでやうやく一〇〇%の仕事が出来るわけで、これは容易な業ではありません。只歩いただけでも、一往復六〇〇米として、二十五往復では一万五千米(約四里)もの距離になります。この半分は、一人十五貫ほどの砂利を担つてゐるのです。かうした苦しい重労働が毎日續いたのです。

も筋肉労働をしなかつた私には堪へ難いほどだった。連日の疲労で、ついに私は左膝関節が非常に痛みを感じ、普通に歩くことが出来なくなつた。戦友や皆の者も診断を受けてみよ」といふので、私もロスケの診断を受けた所、熱がないから作業を休ませぬといふ。痛い足をひきつり、チンパをひいてこの作業に従事したが、こうしたとき戦友三人は、自分のノルマを終了しては私の姿を見かね「おい、〇〇ひどいなあ。全くロスケは血も涙もないなあ」「そうだ、ほんたうに「らいよ」「しかし、なつかしい父母や妻子に合ふためには、この苦難を乗切らねばならないから俺も頑張るよ」「そうだ、お互にもうすこしだからやろう」といつて語り合つた。そして「よし、大津休んでゐる。俺が残りばかりでやるから」と云つて、自分の疲れてゐるものとははず、いつも助けてくれたのだ。こうしてきつい作業に堪へることが出来たのです。又今年の夏には、今までかゝつたこともないマラリヤになつてしまつた。こゝでも熱が無いと仕事に出される。そのときは、また戦友が側にあつて、二人分を働いてくれた。夜になつて熱がでると、戦友は綿の様な疲れた体もいとはず、ねずに看病してくれた。私は病床でいつも泣いた。朝起きると、「今日はどうか」とやさしい言葉をかけてくれた。熱のため、飲を食はんと「だめだ、食はなくては」体をやつれさせたら、回復がおそいぞ」といつてはげまして呉れた。飯が食へないときは、果物などを苦心して求めて来て「おいリンゴを食べよ」すもももあつたから」といつて、私の身の上を心配してくれた。私は、一人で寝てゐても、どうしても死ねない、どんなことがあつても俺は帰るんだ、そして□□□父母妻子に合ふのだと、いつも心に思つてゐた。この戦友と一緒に内地に帰り、恩を返さねばならないと誓つたのだつた。私は幸福だつた。今俘虜生活の苦難から解放されて、祖国の土を踏み、戦友の有難さを感じしみと感ずると共に、無限の感謝を捧げるものである。私が生きて帰つて来れたのも、戦友あつてこそだ。拜む戦友の友情を。

〈第三話〉(提供者名欠)

行程一万二千軒、車中言語の絶する悪循環と闘ひ乍ら、一ヶ月に垂らんとする貨車輸送の末、やうやく目的地グルヂョア共和国クタイスの收容所に到着した吾々日本人俘虜一千名余の者は、すでに精神的にも肉体的にも疲労困憊の極に到してゐた。過半数以上のものが、はげしい下痢で栄養失調に悩む患者だつた。だが收容所側では、ほとんど休養と医療衛生の手を講ずる同情もなく、数日後には、苛激な労働作業に従がはしめたのである。托くずへきもない捕虜の身である。誰

し兼ねた。此時、人に隠れて秘か□病に倒れた戦友に、乏しき賤囊を割いて果物を買与へて居た事が一年後に成つて判明し□のであった。

居住地 鳥取県▽▽▽▽▽▽▽▽ 上等兵 △△△△

□は、昨年八月、食糧も水も充分与へられ無いで、二十八日余の長途、汽車輸送に全員一千二百□名は疲れはてた体をゲオルデア共和国首都トピリス市に降され、疲労快復を待つて毎日なれぬ作業に挺身して居た。大阪市出身の△△△△君(二四才)はどうとう倒れた。□自身に原因不明の発熱、續き体も段々衰弱して来るが、作業中も患者の制限で軍送が休ませてくれん。食飼療法に新鮮の菓物、林ごでもと思ひ乍ら、其の金もない哀れな有様だった。同君は、其の後、病状一進一退、遂に入院し、九月余消息を断つてしまった。今回、飯□に当り、偶然健康な△△君も駅頭に発見、お互の健康を喜び合ったが、其の時前記▽▽君は、△△君発病以来、自分の持物を賣つたり、時にはパンさへ賣つて、林檎を一ヶ月□上に互り与へて居た事を□し、自分はそれに依つて、あの時病死しなかつた。元気で飯□るのは▽▽様のお蔭ですと、涙を流して感謝して居るのである。□生の恩人として一生忘れませんと小隊長の私に告げたので有った。▽▽君の隠徳こそ、感囚生活中の義談の一つとして挙げるものです

〈第六話〉 神奈川縣○○○○○○○○ 主計曹長 ○○○○

停戦後、ソ連の手に抑留せられたる我々は、雨の日、雪の日の如何を問はず、ドバイドバイスカースカーと壓らしいロシヤ語で言はれ乍ら、労働させられ、それが爲、健全なる身体をこわして、父母妻子兄弟に再會する喜びで逢ふ事なく、パミール山麓カザックスタン、死の砂漠と云はれる地にて、あはれ黄線の地に旅立つた戦友には、眞実に氣の毒な事であると痛感する次第である。此の古今未曾有の此の苦しかった收容所の生活中、眞実に我々六〇〇名近くの爲に盡力し、然も此の度一緒に栄豊丸に乗船し、懐しき故郷日本に帰る事なく、未多ソ連領に□口助に使はれて居る人、陸軍主計中尉、△△△△氏(山口縣出身)の話を御紹介しま□う。それは物資の豊富なる國にて、あの銀色に光る白米に、香の高い味噌汁に、そして色の良い澤庵等、非常に美味しく、然も腹一ぱい喰べられて居った。我々が一定の定量を定められ、然も其の定量たるや少量にして、軽労働する人間でも不足であろうと思はれる位の量しか与□わす、然も労働たるや、鉛製鍊の重労働の工場で強制労働させられた事も屢々でした。それが爲、七八疋より十一、

十二疋位の体重の減少を来たしもの、程ど全員と云つた過言では無い有様でした

〈第七話〉 静岡縣○○○○○○○○○○○○○○○○○○ 陸軍兵長 ○○○○

ウクライナ共和国ドンバス州アルチョモフスク第四一五收容所、これが我々の抑留されて居た收容所の名前です。この收容所の大隊長をして居られたのが、陸軍大尉△△△△△氏でした。我々がアルチョモフスクの着いたのは、二十一年の八月下旬でした。停戦後、既に一年、兵隊達の心も荒んで居た。終戦以来、唯祖国帰還をのみ夢見る我々は、何回も何回も偽らた上、遂にこのヨリロッパ、ロシヤにまで足をふみ入れたのです。兵隊達の心が荒むのも無理からぬものであった。加ふるに、社会生活から力の絶されたといつて、生活です。勿論、ペン等握る機会もない所か、一枚の新聞も一冊の本も見ることもないのです。我々は、殆んど大部分が強制労働の結果、肉体的にも衰へて行つた。こうして我々は、ぼけて了つて居たのです。こうした兵隊、約千五百名が、この收容所に入ったのです。そして△△大尉が大隊長としての最初の仕事は、先づ將校炊事を止められ、兵と同一の食事を取られたことでした。一部には、恐らく不満な將校もあつたことと思ひますが、大隊長自ら率先されたので、ついて行く外はなかつた。△△氏の我々に対する思ひやりは、本當に涙ぐましいまでの父親以上の愛情だった。作業に出る一人一人の顔色に氣をつけて、何くれと注意し、寒むさうにしてゐる者には、自分のオーバを着せて出してやる大隊長だったのです。そして又、そればかりでなく、深夜一人便所にたゞずんでゐる大隊長を見た人も少なくなかつた。こうして追、我々の健康状態を氣づかつて居てくれたのです。アルチョモフスクの收容所から派遣された兵達は、皆んなやせ衰へて帰ってくるのか普通だった。しかし、もどつて来ると、又日ならずして、元氣を取りもどすことが出来たのです。これは何んの爲か、勿論給与もよかつた。大隊長の努力によつて、常に定量を受領したし、又一粒といへども横流れも許されなかつた。しかし、本當の原因は、それ以上の精神的なものがあつたのです。大隊長となら何処にでも行ける。大隊長とならどんなことでも出来る。總ての兵の心をこゝまで握つて居た大隊長です。従つて、大隊長の下に歸つて来ただけで、既に我が家に歸つたやうな心やすきを覚えたのです。これが我々を精神的回復させてくれたのです。この大隊長の大きな愛情の中で、我々は始めて生き抜いて、なつかしい祖国に歸り得たのです。もしも△△氏が居なかつたなら、我々の内の少なからぬ者が、ウクライナの土となつて居ることせう。私自身、恐らくは再び内地の土を踏む機会を与へられなかつたことせう。この愛情、多くの同胞が救はれたのです。アルチョモフスクの

本兵の強制労働は加重し、殆んど休日になかったのである。大隊長△△大尉は、百方手段を盡して交渉したがいれられなかった。けれども一切の責任を自己のみで受け、我々には皆はせなかつたのである。点呼の際は、常に日本人の良心に恥ずるなど話された。今でも忘れ□□言葉である。これは毎朝唱話したのである。

(1)我等は、今日一日の無事を明朝活潑に挺身しよう。
(2)我等は、如何なる困難も團結の力で打ち勝とう。

(3)我等は、日本人の良心を持つて最後迄頑張りよう。
この標語の許に無事昨年は越したのである。たまたま今年の一月過労のため、四十二度、四十三度の高熱のため、入院した時は隊全員の親でも失った様に力を落した。併し一月のばかりで退院し、七月までいろいろ御指導して下さい帰還準備により、將校全員轉属のため去られる時、誰か泣かざるものがなかつたのである。一年有半、七百名の隊員中一名の事故者もなく、不具者もなく、来た事は△△大隊長の細心の努力の結果と、指導宜しきに依るものである。又、この大隊長の副官として、寢食を忘れて連日努力された▽▽▽中尉、当收容所將校の努力のお蔭で、我々は帰還出来たので、將校は後一年労働するのだと齒を喰ひしばつて、労働を續けてゐる。それを思ふと何と言つてよいのか、感謝の言葉を知らないのです。

《第二一話》奈良縣○○○○○○○○○○ 兵長 ○○○○

電車工事で拾つた話し

私達の收容所は、第二イルクーツクにあつて、主として建築作業を担当してゐました。現在は、ソ連では労働力の不足してゐるの□と、住宅難に苦しんでゐる事は何人も否めない事実で、こうした建築作業は何処の收容所も殆んど云つて過言でないでせう。處で、我が收容所で電車工事で言ふのが一つあつて、場所は第一イルクーツクで毎朝汽車で通ひ、中食は現品携行でした。收容所とは約七料位はなれてゐます。電車の附設工事でした。自分達の当市へ着いた頃は、未だ電車を見なかつたが、この電車工事で拾つた話……

この電車工事と言ふのは、今年の六月、ボツボツした帰還のデマが飛び出し、日本人の帰還列車を作業先で見たと話す戦友もあり、気分が浮きたつ頃でした。二、三日續いた雨もからりと晴れて、あのアマガラ河の長い橋で一と汽車ごとにとどつと押寄せる人の群、その中に頬の落ちた真黒い顔をした日本人を見出しました。彼はさも困つてゐる様子に、早速話し合ふ事にした。年令は五十五才と聞いては、軍人でなかつた事は明かだ。「どうしてこの地へ」「国は何處」と、皆は彼を取り

巻いてしまつた。彼は、北海道の者で漁業を営み、停戦当時は、樺太から北海道方面を航海中、ソ連兵に捕へられ、密航者として徴役三年を言ひ渡されて、某地区(夜のない国、毎日、晝ばかりだと彼は話してくれた)に收容されてゐたが作業優秀なため、帰国を許され、見知らぬ国、まして言葉の通じない汽車の一人旅を十日も二十日も續けて、この地に来たのでせう。困つた事にその前夜、ソ連人に後方よりなぐられ、唯一の食物たるパンを取られ、下車して見たのだが、彼の所持してゐる配給券は、地区が違ふとかで何処でも賣つてくれず、我が同邦として、どうして見のがして置かせよう。又その時の私達の歩哨(ソ連兵)たるや実に親切でして、自らあち□ちのパンを求めべく努力してくれましたが、何処でも駄目でした。僅かな中食の中から皆んなで出し合つて飯を食しましたが、さて明る日から携行する食料にはどうにもならず本当に困つてしまひました。その日は、私達の收容所に連れて帰りましたが、ソ連のむづかしい規定があつて、所内へは入れず、外で一晩を明し、翌日、私達作業に出かけると共に、ソ連歩哨も例の者で今日も実に親切、管理局へも自ら行つてくれたが、どうしてもパンを求むる事は出来ずに終りました。

皆んで相談して私達の中食のパン、約百瓦だが八十名分集めて彼に与へた。私達の一食位は食はずとも俺も俺もこの事に讀んでくれる。捕虜は与へても矢張り日本人だ。この美しい心と与へる者、受ける者、共に喜涙がホロリと頬をかすめた。ソ連の歩哨も心打たれたか「そんな黒い顔では旅は出来ない」から(彼は実に黒い顔も手も)とて、入浴に連れて行く、此のソ連兵に対して、私は今でも感謝してゐる。そして、彼はその日の午後帰還するべく汽車に乗り込みました。此のパンこそ、命にかけてもはなさぬと、固く両腕に抱へ乍ら……。彼は無事帰還する様、皆んなで祈りつつ、又、作業にはげんだ。そして、この二人のソ連人、パンを取る者と親切な兵を、今更ら対照して、当時の事を思出すまゝに。

《第二二一四話》(提供者名欠)

收容所間の美談

一、一日の過労の身を引ずりながら收容所に帰つた。○○○○君が入室の戦友に激励の言葉を与へんためここ数日病室を尋ねていたが、急激な患者の状態を目の前に見、自分の身体保存すらうたがはる捕虜生活に、尊くも大切なる血液を戦友に与へ、復活の幸を讀めた。その時、彼は脳貧血にてそつ倒せしとこれを聞く。吾等は、日本人の戦友愛の強さをどれだけ感銘したでせうか(於シヨルシア州チベリス收容所)

二、我々の唯一のたのしみである食事、全夜の食事は、◇◇炊事班長の挺身的奉仕の賜だと戦友にきかれ食事を済ました。それは、吾が収容所は、非常に水の便が悪く、三度のスープを作る水すら自由にならなかった。その日も一滴の水すら夕食のスープにたけぬ様、ロスケに申し出て、今なほしてやる。今やつてゐるで、その行爲を見せられず、四時をすぎた。◇◇班長はこの様を見て、柵外にある水道栓に無談飛び出し、供水修理をした。この時、ロスの日直將校が来て、非常な制裁をしたそうだが、我等七百名のためごう膽にもやりのけられた。

（於シベリヤ州チベリアス
第四収容所）

三、吾隊の一小隊長をされてゐた△△△君は、分隊員の若者でAと言ふに、少量の給与の中から、一片のパンをたびたび与へてゐた。彼の若者A君は、身体が大きくて与へられる食糧では身体が續ぬ。これでは仕事が出来ないと、やゝもすれば変な氣持を起させてはならぬと、自分のパンを与へてた。A君はこの感謝、感激をしのばせきれず、誰にでもこの事を話してゐた。

（於同収容所）

〈第一五話〉軍曹 ○○○

何が何やら分らぬ間に、朝鮮平壤三合里収容所へ捕らはれの身となり、此の世と御別れの時期来りと断念したので。昭和二十年十一月二十七日、平壤去る事四、五里の地点、龍城の使役隊として一〇〇名出たのですが、日本人の姿一人見えず、翌年四月二十九日、使役部隊平壤秋乙の収容所へと集合したのです。何處から出たのか、帰国のためとのデマが飛び、我々は本当にそうである事を祈つた事でせう。然し、我々の運命は、喜びへと轉回するのではなかつたのです。六月十八日、平壤出發興南へと輸送せられ、興南よりソ連ポゼットへと海路、輸送せられたのです。

始めて見るロシアの國、何處かで既に鳴く秋虫の声の八月二十五日でした。虫の鳴く声も□□□□、又心で泣く我等の寂しさは、何ともたとへ様がなかつたのです。雨の降る□□□□どろどろの暮舎の収容所、故郷遠く離れたロシアの國何時になつたら懐しい故郷へ帰れるのか、思ふだに妻子が恋しく、知らぬ間に落ちる涙、またまた悲しみの旅は續く。八月二日、貨物列車へと豚の如く詰め込められ、一步も外へ出る事の出来なかつた苦しみ、二十五日間の汽車の長旅、ここはグルジニヤ共和国トゴ國境クタイスでした。輸送間の糧秣、やつと命をつなぐ程度、糧秣車よりかつぎ出しては、地方人に賣るロスキを見ては指をくわへてぐつと空腹をこらへる事、幾度ぞ。クタイス収容所へ入つても同様、塩けのない障子張りす

る事より未だ薄い、ねばりのないのりをすゝり、強制労働に従事する事一週間、この苦しみ、何んと言つてよからう。あの遠いグリジニヤ共和国、どれ程故郷の山河を思つた事でせう。照るにつけ、曇につけ、日一日として忘れる事の出来ない懐しい故郷日本だったのです。苦しい時はぐつとこらへ、悲しい時は涙をおさへ、どれ程帰る日の早からん事を祈つた事でせう。最、すぐ帰る、帰るとは何時とも云ふロスキの口、誰も信んずる者はなかつたのです。その間に、あの遠かグリジニヤ、クタイスの収容所でなく、戦友十一名、当時、大隊本部書記をして居た關係上、医ム室に見舞入室の戦友を勵まして居たのです。なくなられる瞬間、お母さんと幾度呼んだ事でせう。あ、昨日一人の戦友と別れ、今日又、一人、明日又一人と次から次へとたはれて行く戦友、共に帰る日の早からん事、又無事なる事誓ひ合つた事幾度ぞ。これ皆、食糧關係、栄養失調でたはれたのです。毎日の如く、葬式をするこの氣持、何人ともたとへ様がなかつたのです。又、或る時は検査と名をつけては、我々の持つて居る少しばかりの品物、取あげるロスキの本当に着のみ着の儘の一着となつたのです。生きようぜ、死ぬな、頑張れ、辛抱せ、元氣出せとお互ひに語り合つた事、幾度ぞ。然し、苦境は何時までも續かぬ。遂に救への路が開かれ、八月十八日、帰国のためと言はれ、列車に乗せられたのです。然し、まだ誰もが信んじなかつたのです。二十五日間の汽車輸送、九月二十二日夕、ナホトカに着いて始めて帰国のためと信じたのです。然し、この収容所も亦苦手、こゝにはかつての戦友日本人が民主グループとか名をつけて盛んに民主運動をやつて居るのです。奴等の氣に入らぬ者は、又再びここから作業に追え帰されるのです。あの様な奴等、何を云ふかと思へど帰へりたい、一年何んと言はれてもはいはいと、どれ程氣を使つた事でせう。奴等は、祖国日本、故郷恋しさの念のない連中なのです。聞く所に依りば、希望で残留してゐるとか、鳥なれば飛んでゆきたいもんだらう。きたない暮舎に寝ては、一人泣かざるを得なかつたのでした。又隊員は、一日としてゆつくり出来ぬ作業の連発、飯もろくに食ふ事の出来ぬ状態なのです。集合が遅ければ帰へさないとか言はれ、恋しき日本へ帰へらんがため、どれ程苦勞した事でせう。忘れぬ事の出来ぬ九月三十日（ナホトカ収容所は一から三迄あります。着いて一に入り次に二、次に三収容所へとそこから帰へるのです）、第二収容所が患者で一杯（こんど入港の船で引揚げる予定）なので、第三へ移れと言はれ、急いで整列（誰となく云ふ声あゝ、あの船だ、日本の船だと見れば、確かに日本の船赤十字のマークをつけた高砂丸）だったのです。直ちに第三へと出發、此處第三では引揚部隊の復員式の眞最中だったのです。我々が到着後、間もなく終はり、出發部隊の指令なのです。所が、何處から投げ込んだのかこの幸運、當部隊にも出發の指令が来たのです。あゝ今が、今迄思はなかつた。あの病院船で帰へるとは思はず涙が出たのです。直ちに

收容所出発、港には今や遅しと待つてゐる高砂丸。上船開始が始まれば急いで昇る。あのブリッジだったのです。知らぬ間に出発だ。あゝ、これで本当に帰れるのかと始めて安堵の胸を撫でたのです。高砂丸の一夜は、明□夜は明ける、十月二日早朝、日本の山が、家が畑が見えた時、思はず、流れる涙、全く夢の様でした。

港には、援護課長様を始め、各係官の御方が出迎へにいられて居たのです。終戦後始めて踏む祖国日本の土だ。力強く踏みよと強く踏む。係官の御方に連れられて寮に入る。こゝで何から何まで世話になり、復員業務も無事終り、尚その上、被服迄戴き、感謝感激に堪えず、隊員を代表して心から礼を申し上げると共に、各係官方々、日夜業務の余り、御身体をそこねぬ様、心から祈りつゝ、御別れ致します。

(尚、戦友十一名分の遺骨は御世話下さる係官に御願ひ致しました。)

昭和二十二年十月六日

〈第一六話〉東京都○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○ 伍長 ○○○

仁の道

トルコを望むコーカサス山脈の山の頂には、未だ白雪も残してゐる。「今晚も十二と二時と四時に起しをたのむ。検温があるからな」「每晚本当に御苦労様です」「いや、之が衛生兵の務だ」と軽く笑ひを見せて、S衛生兵は起しを依頼し、医務室に帰つてゐた。大陸的氣候の不順が、冬期間の疲労と栄養失調が、四月に入り、風土病かマラリヤか流行性の風邪か、何か原因不明の熱発患者が續出した。当時、ラーゲルの医務室は、軍医一名とS衛生兵一名で、診断治療、又は看護を一切の業務を行はねならなかつた。S衛生兵手製のサンダル下駄は、一ヶ月にて使用不能となる位、吾々のために、毎日骨身を惜まず働き、保健衛生にラーゲル内を歩き、母親の如く面倒を見てくれました。

海拔一五〇〇米の山奥だけに医療機関など全くなく。満足な薬さへ無い始末。只頼むは体温計一本のみ。如何にして病症を判断するか。責任感の強いS衛生兵は、綿密なる注意と、鋭き観察力を以て、患者に接しなければ一命を失ふ様な大事を起すと、今晚も疲労の極に達した体を休めることなく、真夜中に二度も、三度も時間検温に起きたのだ。検温だけでも暗いランプの光の下では大きな仕事なのに、39—40患者が下痢を伴つてゐるので、大小便済の始末までしてやらねばならなかつた。歩行困難なる者、失禁をする者、夜を明かして看護に専念した日は幾度か續いた。傳染性があるとの□しを語にて、ソ軍より病室の面会は嚴禁され

た、辛苦を共にして来た戦友も見舞には来てくれず、只御世話になるのは、医務の母親ともたのむS衛生兵一人であつた。患者を治すには、看護より外に道はないのだ」とS衛生兵必治の信念を以て患者に接し、患者は医務室の母親を信頼し、「必ず治る」と意気込んで居た。兩者の精神的一致こそ、眞の日本人同志であり、仁の道でせう。毎日大小便の香りする病室片隅の板の上に休む前には。必ず寝入る患者の頭に手を静かに当て、三十数名の腸と熱を観なければ床につかなかつた。「お母さん。白米の握飯」「△△さんどうした」△△上ト兵は、兩眼に涙をばい浮かべて居た。「今、お母さんが白米の握飯を持って来てくれた夢を見た。熱のため、遠い異国の地で懐かしい母親の夢を見て、又白米の握飯を夢に見て、涙を流したのだ。涙を流すのは一人、△△上ト兵だけではない。吾々將兵がどれだけ故郷肉親を想ひ、味噌汁を夢観た事でせう。

乾坤既に決り年の闘争

幾多辛酸空一夢

星霜不変月清光

將兵済看感激中

常に元氣にて内地に帰ることを希望に持ち、共に勵ましつゝ、幾多の試練に當つてまいりました。五月若葉の候には、續々退室し、一人の犠牲者がなかつたことは、本當にS衛生兵の献身的苦闘の賜と信じます

〈第一七話〉東京都○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○ 少佐 ○○○

「自活製薬大衆を救う」

昭和二十一年六月、齊々給爾編成作業第十一大隊ヘテタ州カタイ在ハ給与不良(養大豆、野菜なしパン定量三五〇g)のため、夏期疲労と重作業の疲労とに加へ、大腹カタル、及赤痢蔓延し、約半数三百八十名の患者を出せり、依て隔離実施せるも、薬品僅少にして一同憂色に包まれたり。

この時、陸軍技手△△△は、獸骨炭粉の偉効あるを知り、鉄製容器を造り、炊事の廢物獸骨炭粉の偉効あるを知り、鉄製容器を造り、炊事の廢物獸骨炭粉をいれ、「ペーチカ」を利用して、多量に之れを製し、下痢患者に服用せしむる処置をとれり。△△は当時、脚氣等にして病中なりしも、連日不休の努力をなし、以て大衆を死より救助せり。ソ軍の指揮下に在りては、何事も交渉実現容易ならず、只々衆を救はん□の行動は衆の模範たり。